

弔 辞

皇学館大学教授 後藤丹治君急逝の報に接し驚きの余り言葉を知らせん

先週の水曜日のおと新年度の懇親会を催しました席上 新任を代表して元氣に御挨拶いただいたのが君でありました 私共は全学を挙げて君をこの四月より専任教授としてお迎へした事を誇りとし且つ私としては良き相談相手を得たことを心より喜んでいたのでありましたが 何といふ事でありませう 忽ち幽明界を異としてもはや君と肝胆相照らす事は出来ません

思へば 君は明治三十年三月二十八日に生をうけてより六十六年の生涯を全く学問と教育とに捧げ尽くされました 大正十年神宮皇学館本科を卒業 更に大正十三年京都帝国大学文学部選科を卒業せられ 愛知県第一中学校教諭 東京帝国大学史料編纂官補 立命館大学専門部教授 立命館大学教授 大阪学芸大学教授を歴任 その間「兩月物語研究」により文学博士の学位を受けられました 本年よりは皇学館大学教授として母校の講壇に立たれる事になり 新しい希望を抱いて伊勢に赴任せられたのであります

その学風の着実綿密は学界のひとつしく感歎する所でありましたが特に中世の戦記物語及び近世の読本を中心として君の研究は前人未踏の業績として長く後世に遺るものと信じます また 君は資性篤

実温厚 心身を尽くして学生を教導せられました その高風を仰ぎつつも永き訓陶を受くるを得なかつた事は最大の遺憾として 君が急逝を承つた学生の獻欷して語る所であります

願はくは君が靈よ 願し世に在りし日の如くに吾等の協力刻苦して皇学館大学の建設に邁進しつづあるを導きたまへ

驚きと悲しみの余り辞まともらず意尽くしえぬものがあります 吾が衷情を披歴して弔辞と致します

昭和三十八年五月三日

皇学館大学々長 平 田 貫 一

弔 辞

先生御急逝の報に接し 我々立命館大学において職を共にした先生の御教えを受けました者共 まことに まことに哀悼に堪えざるものがあります

先生は性篤実 一心誠意を以て学究の道を歩まれ その学風は先生の御性格のままに着実正鵠 実証の極致に徹し全く独自の業績を積まれたのであります

先生は昭和十六年 我が立命館大学に御赴任になり爾来二十有余年我々の先達として新制大学院の創設その他に多大の功績を残されました またその間立命館大学日本文学会の創立にあたっては鋭意

その労を惜しまれず爾来今日に至るまで御教導を戴いたのであります

我々の敬慕限りなき後藤丹治先生は今や幽明界を異にされ再びかの響咳に接するを得ません。しかしながらこの後先生のみ靈は無言の声となつて我々後進の胸にひびくことでありましょう。先生の声なき声は、時には鞭となり時にはなくさめとなり我々の微力を助けて戴けると思うのであります。我々は及ばずながら先生の志を

つぎ益々学究としての道を深め先生の学恩に報ゆる所存であります。何卒先生のみ靈のとこしなへに安らかならんことを切に祈り上げ

昭和三十八年五月三日

立命館大学日本文学会

代表 和田繁二郎